

加島英国（吐洲）宛黄花庵升六書簡の翻刻と解題

―都市の俳諧宗匠と地方俳人の関係―（翻刻篇）

湯谷 祐三

【凡例】

- 一、白杵市所蔵加島英国資料の中の加島英国宛黄花庵升六書簡十一通（卷子一卷）を翻刻する。解題篇は熊本県立大学日本語日本文学会『国文研究』六七（二〇二二年九月）に掲載。
- 一、【1】から【11】まで、順に書簡番号を付し、「1」に題を付した。
- 一、通行の字体を使用し、句読点を付した。
- 一、割り注は（〜）に入れて示す。本紙欠落箇所は□で示した。
- 一、【参考書簡】として、半時庵淡々から白杵の兔六に宛てた書簡二通を付載した。いずれも白杵市所蔵加島英国資料である。「兔六は後藤氏、屋号肥後屋、名を用助といい、同地（白杵のこと―引用者注）豊屋町住の上人。「享保二十年春三月下浣日」に淡々が兔六に与えた「俳諧之伝系」一卷があり、その頃に淡々に入門したものと推測される」という（大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』三五―頁）。

【1】「草庵之風雅、日を追て盛ん」（三月十五日付、正風道場↓吐洲・嗅英）

新年御同慶申候。愈御安福之旨、

奉賀候。正月五日と御日附之貴書、

二月二十五日致庵着候。月並御入句

二月分にも間二合不申、当月加入申候。

乍併開卷十九日丁摺出来、二十五日二

□は月並貴答、跡便二可申入候。当

春興摺物二御句致加入候処、摺物

職かた大二隙入、漸此頃致出梓候。

急キ晋上申度、則御銘々二ハ四葉宛

御落手可被下候。草庵之風雅、日を

追て盛んに相成り、去冬より白嶺

江北之両社加増、今は及七社、月並

二月は三千百余嘯二相成り申候。

御随喜可被下候。扱柱石社春哉

柳草紙と申一集、致梓行候。御句

兼而致加集置候ま、一部宛致

晋上候。集中俳諧当時之流行、

故翁元録（下）之格調にして、亦炭俵

にもあらず、正風道場之風韻能々

御熟覽可被成候。扱愚句、

河内路にふた筋

かゝる柳哉

此一句、去冬摺ものにて入御覧

可申相しるし申候。勿論摺物にハ

出候へとも、無扱此句脇より所望

にて、よ所の摺物に出候故、得晋上

不申候。

来るや来ぬ深山の春を

呼子鳥

正月はしろ水絶えず

路の臺

只の菜を人か若菜を

する日哉

春の戸や恋せぬ猫も

寝て居らす

明くれを山家々と

鳴蛙

畑うちやいくか打ても

おなし畑

朝かけや薬時分からの

岡の家

旅人か踏は窪ミテ

春の水

梨の花あまりといへは

しろ過る

春の行ありさま

見せる野の芒

なと申出候。貴評可被下候。余は

月並返事二可申入候。草々可祝。

三月十五日 正風道場

吐洲様

嗅英様

尚々摺もの入用一人分五匁

か、り申候。ふた葉草料月並

花賈慥ニ請取申候。

【2】「浪華は今俳諧の昼」(正月二十五日付、黄花庵↓無々庵)

尚々摺物料銀拾匁、慥ニ落手申候。

新年佳祥御同慶申候。愈御万福

御迎春之旨、奉寿候。拙庵無事致

加年候。御放慮可被下候。当正月三日

御認之貴書、速に当十五日相達申候。

扱も久々御便も無之故、いか、御凌

罷成候哉と殊外案し候へとも、草庵

之多事亦徒に過たり。依之旦夕

心頭ニか、らさる日なしとは申せとも、

当用ニ追立られ、百家句選だに

いまた草稿ならさる程之事ゆへ

慮外之御不音申候。旧年は御所労

之よし、御便なきもさる事なり。

愚老も旧病いまた不治、しかも当

春の寒気によほと不出来、こまり

入申候。風雅は追々増長、当正月

月並杯も三千五十嘯、前代未聞

之大寄ニ御座候。丁摺一組晋上申候。

当巻頭、松むしり万歳の妙を

御覽可被成候。松むしり一向なき物を

流行に御つくりとよく案し付申候。

万歳是もふるミをすつはり離れ

なん、この三字に大家の広庭、梅も

椿も多樹にして、万歳の腰をち、め

恐入たる御事見るか如し。海内の

風雅大二及高趣、雀躍申候。去年ハ

愚集買本ニ出候故、一部入貴覽

申候。貴家の御草稿拜嘯申候処、久々

御懈怠には似もつかず、少しも後レ

無之、面白承り候。幸ニ百家集いまた

間に合候故、嬉しきハかり候。二十七句致

加集候。猶、正月の小家任来命

当春興大摺物ニ加入申候。当年は

新深川集ト申、附合の買本も出し申候。

書林目錄入御覽申候。浪華は今

俳諧の昼ニ御座候。月並通題

少し晋上申候。新連なども御取立被成、

数組御取次可被下候。草庵旧年

致転庵候処書、月並通題の奥ニあり。

愚作少々。

ひと、せの呉竹一眺になり

元日や夜明る迄の山家集

ふる道や松に懸たるわら盒子

薄雪や寒ンはあけねと春の雪

柳から春の夜道ハ付にけり

※「、」に濁点あり。

似た猫を見ても呼也春の家

水鳥や陽炎踏て空を見る

永き日の奥か見えけり奈良反古

鶯や何もやらぬにけふも来る

咲過る程は咲すも梅の花

両側に梅の咲たる野川哉

なと申出候。余は摺もの御覧可被下候。

猶春深く御風流承可申候。可祝。

正月二十五日書 黄花庵

無々庵様

尚々百家選奥書

豊后州臼杵掛町

吐洲 煙草屋弥平太

号無々庵

右之通にて宜候や。思召も候ハ、急便ニ

御申越可被成候。

門人升岳三万句存立ちらし晋上

申候。御世話可被下候。

【3】「貴庵を正風道場西国の探代に」(臘十四日付、升六↓吐洲)

神無月十九日出之御細書拜見。

風雅御執心甚感し入候へハ、乍不及

貴庵を正風道場西国の探代と

せずんハあらしと存候。御草稿致

一覧、則及愚評候貴句。

橋ひとつ見えて夕日の柳哉

柳を水辺となす所、当時の流行に

あらず。今の流行といふハ、人の仕来り候

ふることをせず。いやミぬめりならして

さるくくとやすく、しかも一節をこめて

故翁元録モトの格調の中にて、すぐり

立たるよき処をなすを則流行

とは申なり。世人のいふ流行にハあらず。

是正風道場の流行としるへし。

翁の柳ハ

八九間空て雨ふる柳哉

此こゝろハ、柳の青々とたれたるには、

雨の紛れてあらハに見えざるを、八九間

空て雨ふるトハいえるなるへし。

愚句十ヶ年程前二、

柳より西に成たる小雨哉

七八年前二、

いくたりも旅人通る柳哉

爰々に一双眼をひらきて、御工夫

可被成候。去年の柳ハ、

北国は日和すくなき柳哉

今年又柳あり。春の摺物御覧

可被成候。貴句梅摺ものニ出し可申候。

百家句撰、御内意致承知候。扱

寅の巻差下し申候。御入句可被下候。春哉

柳さうし三歌仙晋上申候。是は

よき出来二候間、附合も爰々を御勘弁

可被成候。豊後高田春波スリモノ

入貴覧申候。月並丁摺御入手可被下候。

明春よりは数組御入句可被成候。

草庵月並句、栖あるもの、一人四組

より已下の者は多く無之候。

月雪のあかりか付て室の花

午過に蒸物もらふ師走哉

朝霜や夜からた、く直し釘

一朝は師走のしれぬ深雪哉

菊柴も交て

二把なき年木哉

など御聞可被下候。拙老いまた病中
当寒氣に堪兼、諸答断申候。
万々春深く可申承候。可祝。

臘十四日 升六

吐洲様

尚々、ふた葉草并二月並入料
別昏之通り、請取申候。寅の巻も
料ハ四匁五分ニ御座候。嗅英子
返書御断申候。貴庵より宜御致声
頼入申候。春の摺ものにて者、御文通の
霞の句を入置申候。

【4】「草庵あまり繁昌過候て甚多忙」(四月一日付、正風道場↓無々庵)

閏月念二発之花簡、今朔日花
屋庵より相達申候。愈御清福之旨、
欣然之事ニ候。拙老春暖を得て、追
日快方、依之多田と申処に致入湯
候処、相応にや此節は格別快く、致
大慶候。乍併草庵あまり繁昌
過候て甚多忙、養生出来兼候には
こまり申候。愚撰之万句、当年は凡
十二三万も相見え、今より胸つかへ
申候。雲州清水寺万句、当時六七万も
相集り候様子に承り申候。いまた巻は
まいり不申候。貴家御取次、百九十章
入花九匁四分慥ニ落手、間ニ合候へは、
早速相届可申候。扱備後尾道万句、
浪花升岳、三万句ちらし、差下し申候。
御世話頼入申候。升岳寄ハ高判集
類題ニ仕立申候。且両処ともはや追々

寄かけ候へは、寄次第三四度にも入卷
之積ニ候間、早々御出草可被遣候。

流行百家集、遠国之社中、同時に
あまた出草之事故、はからず百家ニ
あまり申候。遠国無扱事故、皆々及
加集。多用中なれとも此節草稿

書終り申候。奥書名録御紙上之通、

吐洲(豊后州白杵城下掛街、号無々庵)加嶋弥平太、
如斯相しるし置申候。蟬の御句、御得意
のよし故、是も間ニ合候へは、

水と樹のふたつ揃へは蟬の声

書入、甚句都合宜致随喜候。貴家
風雅之御篤矣、兼而承知之事

故、いかにもして御取立申度、内存ニ

御座候。しかれとも、庵中之多事、徒に
過たり。こゝろはかりニ不行届、無念之

事ニ候。折から之籠摺少々晋上申候。
且愚句。

三月の雲と成けり裏の山

ミよし野のよし野にふるき雛哉
其ハから馬もあるかす藤の花

ひとさかり蝶にも曇る野かけ哉
毎日や去構へする浦の雁

多田にてあまり寒かりければ
木からしは云ハ、云る、春の風

明らかに山見る春の寒さ哉

夏は

更衣松はくろミの付にけり
日をうけて若葉もはやき野梅哉

一声は鶴より嬉しほと、きす

聞く時の皆はつ音也ほと、きす

春雲や四月の空の杜若
なと申出候。早々御答。

四月朔日賀 正風道場
無々庵様

【5】「御地之産物海雲一桶」(五月八日付、正風道場↓無々庵主人)

四月十五日発之貴簡、当六日相届

申候。愈御清安奉寿候。新春の御

摺物、御握手被下候由、致安堵候。

急便之折柄、被懸御心頭、御地之

産物海雲一桶、遼遠之処、

御贈惠不相替御実意御懇

篤之程、不浅辱申請候。沢山ニ

被下候へは、社中夫々致配当、俱に

致賞翫候、呉々も辱存候。あまり

急便故にや、御作承り不申、是のミ

残情之事ニ候。折から若葉日記

てふもの出来、且正月分丁摺

一組晋上申候。新深川集、今四五日

之うちには出来と存候。百家集ハ

七月にもかゝり可申候。貴名加嶋

弥平太ト出し申候。野句当座。

水草は花のさかりの五月哉

只降や夜た、日た、の五月雨

早乙女やよき子同士かふたり行

しやん／＼とかたついて行植田哉

竹植てひとり寝て見る竹の月

人も見ぬ夏木の中の椿哉

雲はやき夏の不順を草の蝶

春梅や終に乾かぬ庵の苔

蝙蝠は西に騒くや松の月

庵の夜を崩しに來たり夏の雲
咲出して芥子はちつともおくれさる

かた蔭のさくら淋しき其雲哉

赤松にうつる四月の西日哉

牡丹ミなちる時か來て散にけり

聞く時の皆はつ音也ほと、きす

春雲や四月の空の杜若

更衣松はくろみの付にけり

なと貴庵事は格別ニ含ミ

居候へは、野句よしあしのわいため

なく、底を叩てしるし申候。兎角

数句御修行ハ大事ニ候。出羽

秋田の便りありて摺もの参候故、

遠国之品故、入貴覽申候。

取込御答のミ。

五月八日書 正風道場

無々庵主人

【6】「当時之流行、道場之野風」(七月十日付、正風道場↓吐洲)

貴簡今十日花屋庵より

相達候。且暮少しつ、秋めき申候。

愈御清安奉寿候。愚坊当夏は

よほと出来よろしく候。其よきに

付て専ら養生を加へ、禁酒杯

にて致保護候へは、やかて全快可

申、相樂しミ申候。御放念可被下候。摺もの

愚集相届候由、致安心候。新深川

買本出梓、貴句致加入置候。此

附合、当時之流行、道場之野風、

御賢覽可被下候。聊老骨を入置

候処、恋の句などに世間通用之

恋の詞を用ひす恋を持せ候

自つ事、附かたの遠くして、一体

あるあたり、一卷之変化なんとに、

御心を可被附候。御不審之事も

あるへく候。無御遠慮御尋可被成候。

正答にこまるやうな事は決而

無之候。御当座之御句おもしろく、

段々当調にうつり申候。乍併あまり

流行過るはよろしからず。只愚句を

氣を付て御覽可被成候。当夏の

野句。夕顔の朝のこゝろや

桶の水 此句ある人聞伝へて、

合点ゆかすとて、ある宗匠ニ尋ね

候へは、其答と申て、草庵へ参り

候状、晋上申候。御覽可被成候。されとも

愚意は注者の如きごとくしたる

案にはあらず。

夕顔を夕と案しこむが古さに

朝としたる也。句意は夕顔棚の

下す、ミに一瓢の飲に樂しミをかへぬ

あるじが、あした起してそこら掃

ちぎりて、こゝろ涼しき朝のなかめ

を朝のこゝろや桶の水とは

軽々と申出たり。翁の御句を

後人の注にごてつきたる、多くハ

かうやうの事あるへく候。御心得の

ため、婆心の深切を申入候。

ちる一葉桐は持へきものてなし

朝顔の八重にさかぬそ秋の草

咲々て横日かちなる芙蓉哉

きりくすあまり声よく草冷る

夏は

瓜処や兔なれ角なれ花さかり

葆戸や山吹からす雲の峰

夕顔の朝のこゝろや桶の水

あけほの、松風しろき氷室哉

など御聞可被下候。急キ早々御答のミ。

七月十日

正風道場

吐洲様

尚々、深川賣本句入候かた四匁三分

可被遣候。秋の摺物一葉晋上申候。

【7】「草庵大望有之、明年類題十方句」(九月十一日付、升六↓吐洲)

夷則十六日発之花簡、寄淵かた

より相達候。当夏中は御不快之由、

御こまり察入候。併今程は名残なく

御全快致随喜候。愚老先別条も

無之候。御安心可被下候。被懸御心頭、

御地之名産一壺、御贈惠御懇志

呉々も嬉しく候。朝々養生ニ白粥を

食候へは、日毎の菜に致し悦申候。厚

御礼申入候。折から秋の摺出し、いつもの

辞出来、不取敢晋上申候。○草庵大

望有之、明年類題十方句集致

発行候。此企大騒には候へとも、愚老

滅後、諸国之社中文を寄すへき

目当も無之をひたすら歎たる門人の

誠実より発る処也。忿而其微志

を憐ミて随分の御取持頼入候。其

御社中にて徒の如く、一千嘯御出句

致候間、広く御す、め可被成候。扱明年
三月ひらき候。はしめの巻は当九十
両月に致調卷置候へは、此九十月
のうち二入句無之は、明年三月の開
卷にはもれ候へし。此御心得を以て
無御油断御出草可然候。御地之
社中にて一千の句御出草有之候ハ、
其余は何句にても無料にて加入可
申候間、御近隣広く御す、め可被下候。
右は愚老より御頼申入候。

菊の庵な、つ過ねは日もさ、す
長月をあてに夜鳥は来たりけり
鳴鹿の声かる、時降小雨

名月の夜をしら露の盛かな
いさよひや夕くれ初る暮の山
芒迄来れば灯火隠れけり
八朔や鳴子も鳴らぬ朝ほらけ
朝かほの八重にさかぬと秋の草

題中元

長閑さや元日といふ秋の空
ちる一葉桐は持へき物てなし
などあらましかる附申候。十万句
用、甚多事、早々申止候。不尽。

九月十一日 升六

吐洲様

尚々、嗅英子愚書晋上申度
候へとも、前文之多事故略。宜しく
御致声頼入候。

【8】「当庵十万句大はづみにて」(七月二十二日付、正風道場↓吐洲)

貴簡今日花屋庵より相達候。

去冬已来、御役用にて御紛雜、
御好の俳諧さへ御出来不被成

よし、痛心之至二候。一日俳諧を

せされは、三日の流行におくる、と

申候。暫くも御休俳は風雅の為

には甚毒也。しかれとも、御公務

には是非も無之候御事、御中より

よく、御心頭二か、れはこそ、

遠遼の処、塩海雲一桶御贈

惠御懇志之程、厚致拝取候。

是よりもなんぞ晋上申度候へ共、

草庵の秋摺いまた出来不申、

何も無之候。十万集十座摺

抜三葉、京より到来のすり物

晋上申候。当庵十万句大はづミ

にて当節七万目清書最中、

過年出来如斯駿足よりも速

く調卷之事二候へは、多分当九月

には十万満尾たるべく候。

御随喜可被下候。凡俳諧はしまり

てより今日迄、更に聞も不及事、

前代未聞と可申候。夫故庵中之

多事、徒に過たり。御憐察可被下候。

秋たつ日によめる

あけほのや秋の初日の松の影

曇る上て世話したかるそ天の川

花木榿来ぬ人か来て去たかる

小家から聞初にけり盆の鐘

女郎花はかりかきよんと暮残る

草原や雨にも消す秋の露

ふるき戸や玉棚にさす松の月

藪入のしんて鳴けり秋の鐘

秋風や盆過て吹秋の風

大雨に二日あふたる芭蕉哉

かうやうなおかしからぬ句澤に

可為附候は皆貴主人を策励

の老婆心なりけり。早々可祝。

七月二十二日 正風道場

吐洲様

【9】「是浪花俳林之根本也」(十一月十五日付、升六↓吐洲)

貴簡花屋庵より相達候。愈

御清安之旨、欣然之至ニ候。当庵

無別条候。御安意可被成候。十万句は

御察しの通にて、九万目当霜月十一日開卷

相済、十万目此節清書最中也。

はやめてたく十万満尾之事ニ候。

此節正風道場作事最中、大かた

出来あかり候へは、極月十日迄には新

道場へ引移申候。是浪花俳林之根

本也。御随喜可被下候。扱御産物之梅干

一壺、朝夕粥之菜に相用ひ、大ニ

相楽しミ、何よりも致調宝候。不相替

御心切之程、過分至極辱存候。

御役用之手透云云、御高案之御作

及愚評候。御一覽可成候。寒みに

うつる尾花第一ニ候。草庵明年

月並は趣向立替、四季混雜にて

毎年四季類題の句集出版、一ヶ年

無懈怠出草のかたへ晋上之事ニ候。此

月並は京阪無類ニ候。ちらし晋上
申候。御世話頼入候。

秋も二日とはなき日

大和路に杖を曳て

山尾花横日に見れば折てある

秋篠を左に見たり九月尽

旅泊

もの、音落葉は

なにを夜の更る

埋火のあかりも

あまる旅寝哉

帰庵後

冬こもり明れは

あけて旭哉

ちる段になりて

烈しき紅葉哉

庵の夜は炭

あり切の海の音

翁堂に赤松を植て

庵の松冬至の

影かさし初る

霜月や二日

雀見る浦の畑

横におく行灯

寒し松の音

大雪のふり

盛る時暮の鐘

雑一句

旅鳥は夜さへ

寝ぬ也雨の音

などあらまし入貴覧候。十万句

十座拔籠摺晋上申候。可祝。

霜月十五日 升六

吐洲様

【10】「此句いさ、かも達磨忌くさくなく」（日付ナシ、升六？↓吐洲？）

達磨忌や冬の天気も

菊の花

愚撰之事、此句にても御考勘可被成候。

此菊は秋の菊にはあらず。所謂

寒菊也。此句いさ、かも達磨忌くさく

なくして、しかも禅氣を含たり。

菊は秋に限れりといへとも、冬も又

寒菊といふ冬の菊あり。悉有仏性、

いつれか仏種のあらさらむと禅録を

よくこなして、柳はミとり、花紅なる

へしとなり。達磨忌は尋常いひもて

来たることをせず、千鳥ハ海の沙汰を

云はず、小春に春の事をせざるやうに

なす時は、おのつから古ミは抜侍る

へし。穴かしこ。

【11】「諸州一統無用之文通断申候」（四月九日付、升六↓吐洲）

九国子便之貴書相達候。愈

御多福奉寿候。御国少し百姓

騒動有之由、御心配察入候。当庵

十万句、意の如く当三月十一日、

速ニ開卷、則九国子一心開卷之

砌出席ニ候。則十座摺物ニ出申候。

二会目二万は明後十一日開卷

かくて月々一卷宛開卷申候。当時

五万は既ニ相集り有と。雲州

何某一人にて三万出草有之、

前代未聞之珍事也と人々申あへり。

御随喜可被下候。若御出草ならば

年おくれにならざる様、御出句可然候。

十万句中、草庵の多事、日頃ニ

百倍也。依之諸州一統無用之

文通断申候。○百家句集、段々

延引、漸出板一部晋上申候。

四月も庵の四月は

夏てなし

皆かみなころも

着更てほと、きす

水鶏来てともし灯

寒う成にけり

眼前のささ波かゝる

若葉哉

など早々籠答。

四月九日 升六

吐洲様

【参考書簡1】（寛政九年、半時庵↓兔六）

ラベル「B2―45―右裏3」一六、二×一五八、五糰

（前欠）ハ決而

□よらず頻に

得御意度候。何分

蹇劣、朝夕す□ど

嬢見らに引すられ候。

御存之次第とても

繁昌にて候中、

舎椗者閏七月八日

より行却ニ出申候。

追々書状昨日も從

備前委書上申候。

大あたり富十郎

顔ミせとても、かくハ

有ましなど、備前

備中より申越候。

承候。雀躍不浅候。

稲妻

いなつまに

子をおもふ鵬の

羽音哉

上見すに氣遣ふ

慈愛と申詠候。

紅葉

槌と昏

もたせて

谷の紅葉かな

槌の字、自佗稍申候。

例年京より高雄

奉書ニ打差下シ候へとも

日数かた／＼有せぬ

申候。近日上京ニハ

直ニ高尾之谷ニテ

ミつから抱連て奉自書、

即打参申候。心待にて

いかにも年々自佗

紅葉の句皆同し事

にて御聞可被下候。

先中止候。

不再

半時庵

九月二十八日 (花押)

兔六第主人

※「閏七月」—寛政九年である。

【参考書簡②】(年次不明、半時庵↓兔六)

昨日送兩度ニ五百句

御屋敷より先達而二百句

御届申候。千句ニ御催しと

も存候。且毫懷

忘却被成候而前後当年中

考候而、正月より決而

卷／＼候へ請取、退隱

門弟衆へも申添候。跡

三百句年内ニ当着致候ハ、

考進し可申候。御連社中へ

御申伝可被下候。草庵者、前之通

江戸堀ニ住居致而

年々之非学相補申候。

弥四郎殿又者巴雲丈へも

便ニ右御申伝候可被下候。近来

不平勿々申承候。不再

半時庵

十一月四日 灯下認 (花押)

兔六

第主人

